

かじたま 颯中魂



学級通信
颯中
3年生
2019年11月7日
No. 14
教達検お疲れさま



道徳研究授業「手品師」



読み物について

腕は良いがあまり売れない手品師がいました。彼は大劇場のステージに立つことを夢見て、日々腕をみがいています。ある日、しょんぼりしている男の子に出会います。手品を見せると、その男の子は元気を取り戻します。そして、次の日も手品を見せることを約束しました。



その夜、仲のよい友人からの電話で、大劇場に出るチャンスがあることを知らされます。手品師は、大劇場のステージに立ちたい気持ちを捨て切れずに悩みますが、男の子との約束の方を選びます。そして、次の日たった一人の小さなお客さまを前にして、次々とすばらしい手品を演じるのでした。

「手品師」は、小学校のすべての教科書に掲載されている定番の読み物教材です。小学校での授業を覚えている人は少なかったようですが、みんなにとって2回目の学習でした。今回は中学生となり、身も心も成長したということで、「手品師は、本当に誠実な生き方をしているか？」ということ深く考える授業展開を考えました。

● 手品師は、本当に誠実な生き方をしていますか？



● あなたにとって、誠実とはどのような生き方ですか？

- ☞ 大劇場にきたお客さまは、手品を見たいだけで、この手品師を求めているのではない。しかし、男の子は、ただ一人の売れない手品師と約束して、その人を待っている。約束を破るのもダメだけど、夢をあきらめるのも少し違う。だけど、この人の立場になって考えると、約束を守るほうが私は良いと思う。
- ☞ 売れていないけど、マジシャンを続けているのは、この仕事が好きだからだと思う。自分の利益よりも、他人の喜びを大切にしたいと思ったのだろう。男の子との約束を守った手品師は誠実だと思う。大劇場に行くのなら、ただお金を稼ぐことが目的なので、それはマジシャンという仕事ではなくても良いのではないかな。
- ☞ この話の結末は、誠実だと思う。男の子との約束を破ってまで叶える夢なのか、夢を破ってまで約束を守るべきなのかわからない。誠実に生きている人は、どんな人かわからなくなった。まわりからみて、誠実に生きている人になれば良いのではないかな。

- ④ 自分を必要としてくれる人のもとで手品をすることが、真のマジシャンなのではないか。少年を裏切ってまで大勢の前でやる手品は本当に楽しいことなのか。私はそのようには思えない。自分にウソはつきたくないが、人を裏切ることはもっと違うと思う。
- ④ 約束を守ることは誠実だけど、明日のパンにも困っているのに、自分の気持ちを押し殺して、たった一人の男の子のために尽くすのはどうなのかと思った。自分が本当にこれで良いと思える生き方をしていれば、それは誠実な生き方だと思う。
- ④ 成功したいという思いは当然で、それは自分に誠実に生きていると言える。しかし、男の子との約束を優先してもそれは誠実。どちらにころがっても誠実。もし、自分がこの手品師の立場だったら、男の子との約束を優先する。貧しいが、生きていくうえで最低限の生活はできていると思うので、大劇場に行かなくても良い。それに大劇場のショーを見る観客にとって、マジックはただの娯楽だが、男の子にとっては、亡くなった父親と重なるかもしれない。私は、大勢の娯楽の道具になるよりも、たった一人に特別な存在になりたい。誠実とは自分に忠実になることではないか。



11/6(木) 道徳研究授業「手品師」(たくさんのお客さまがいらっしゃいました)



先生方の研究会で・・・
子どもたち同士の関係が素晴らしく、高度な意見交換が自然とできているクラスでした。「誠実な生き方」について一人ひとりが一生懸命考えていました。
 などのコメントをいただきました。うれしいですね。

そこに愛はあるんか？ ← 担任保坂はこのように考えました。